

第9章

映像アーカイブズについて

大森 康宏 総研大・国立民族学博物館 教授

1. わが国における映像アーカイブズの現状

私は核融合についても、K2K 実験についても詳しい知識はありませんでしたが、現場にいて現在のことを撮るのは可能なので、実験が終了した段階で、このビッグプロジェクトを記録しておく必要があるという趣旨に賛同し、撮影をお引き受けしました。

実は、科学映像については3年ほど研究会を開催していました。私は社会科学ですが、自然科学でも映像をアーカイブズとして残す実験をされていたので、映像を通じてなんらかの共通項を探ることができないかという研究を続けてきました。

すでに欧米ではそういう研究がなされ、わずかずつではありますが、その成果も出てきています。しかし、いざ研究を始めてみると、大学でもフィルムラボラトリーをもっておらず、映像記録も残していない、まさに文字だけで歴史を語る作業を続けてきている現実に驚かされました。そこで各基盤機関や研究所の記録を集めようとしたのですが、実際にはほとんど集まらず、現場での記念撮影写真しか保存されていない状況もしばしばありました。

2. スーパーカミオカンデ関連映像プロジェクトについて

2.1. スーパーカミオカンデ映像の紹介

そこで今回、2005年に私が撮影したものの中から、スーパーカミオカンデ関連について20分程度に編集してみました。私なりの編集ですから専門的な見地からは疑問点もあるかもしれませんが、一般の人にも分かりやすいようにかいつまんで編集したつもりです。そこでは、関連プロジェクトに携わった現場の人々の考え方や実験成果についてのインタビューも収録されています。今後は、すでに引退された方などのオーラルヒストリーも記録として付け加えていく予定です。

(以下、「総研大アーカイブズ——中間報告映像資料」の紹介)

※シーン及びインタビュー対象者

- ・KEK コラボレーション・ミーティングの様様
- ・PS コントロール
川久保忠通(KEK 教授)
- ・KEK 東カウンターホール
入家正治(KEK 助教授)
- ・ニュートリノビームライン
田中万博(KEK 教授)
- ・ニュートリノ観測装置について①(1kt タンク)
亀田純(東京大学宇宙線研究所助手)
- ・ニュートリノ観測装置について②(前置検出器・サイファイ検出器)
横山広美(総研大上級研究員)
- ・ニュートリノ観測装置について③(20インチ光電子増倍管)
亀田純(東京大学宇宙線研究所助手)
- ・スーパーカミオカンデ周辺及び入坑経路
中畑正行(東京大学宇宙線研究所助教授)
- ・東海研究開発センター(J-PARC 建設地)
藤井芳昭(KEK 助教授)

2.2. 映像記録の意味

今回の映像に登場するインタビュー対象者は若い世代ばかりですが、それは現在進行中の研究の成果を撮影しているからです。

映像のできる非常に重要なことは、オーラルヒストリーのように、結果から過去を振り返って当時の記録を残すのではなく、今あるものを積み重ねていくということです。そのことによる成功もあれば失敗もあるでしょう。現在の映像記録は何十年後に、今の若い世代が振り返ったときに成功だったものもあると思います。それらを積み重ねていくことが、映像アーカイブズのもっとも重要なポイントです。しかも、現場でそのときの状況を映像として見ることができます。したがって、インタビューに応じてくださった方々は、それぞれの感情や思いをこめてカメラの前で語っています。

私のほうも、いろいろな話が引き出されるようインタビューや撮影に工夫しました。そのような手法やスキルは、これからいろいろトレーニングしていく必要があると思いますが、とりあえず映像で現実をとっておくことが大事だと考えました。さらに抽象的なものは撮影できませんので、あくまでも現実にモノとしてあるもの、映像として動きがあるもの、現象として起こっていることをそのまま撮るという映像ならではの特質があります。これらを蓄積していくことによって、後の人がその映像を見たときに、当時の経緯や状況が分かるわけです。さらにその中で成果や関係者との協力関係の状況なども再現できるというメリットもあります。

オーラルヒストリーとして、過去の貢献者にインタビューし文章でまとめる作業ももちろん大切ですが、さらにそれに映像の要素を足すことによって全体像が明確になってきます。ただしオーラルヒストリーの場合は、始まりから結末までをつなぐストーリーをオーラルヒストリーの対象者自身が語ったようにつくっていきますから、多くのフィルターがかかるために、現場での実際の記録とはかなり差も生じてきます。

逆に、組織や資金の問題、社会の体制、政治体制などのはざままで、当該プロジェクトがどのような経緯をたどったかという抽象的なテーマは、映

像ではなかなか伝えられません。プロダクションなどでは、まずシナリオをつくり、その筋書きに合った映像を撮影します。しかし私は、科学映像アーカイブズの場合は、そういう作りこみをせず、現場で本人に直接会って話を聞くというスタイルを大切にすべきだと思い、私のほうでは、ストーリーを作ってはいません。あくまでも、本人に任せて話を伺いました。私は将来、必ずそれが生きることがあり、価値をもってくと確信しています。

フランスでは、キュリー夫人が偉大な発見をしたときから撮影した映像も残されています。それを見ると、過去から現状までの歴史を知っている、今のわれわれにとっては当たり前のことですが、昔の映像ほどフィクションに見えてくるという不思議な感覚があります。それが映像のもつ重要な利点だと思います。もちろん映像だけではなく、オーラルヒストリー、論文などさまざまな資料と合わせて見ることによって、さらにいろいろなことが見えてくるはずです。

〈質疑応答〉

—— 総研大全般には残してほしい映像はたくさんありますが、実際に撮影すると非常にお金がかかります。ふつうの映像でも価値があるので、デジタルビデオカメラで自分で撮ってもいいと思いますが。

大森 各基盤機関で予算をたてて、自ら人材を養成し、各研究機関に派遣し、そこでノウハウを伝授し、自主制作する方向で考えたほうがいいと思います。

—— アーカイブズが広報としても使えるのであれば、広報の予算をうまく使えば、いろいろな工夫ができますから、各基盤機関で広報の予算を工夫してほしいですね。

大森 ただ、広報を専門プロダクションなどに外注に出すと、その資料をアーカイブズとして自由に使える権利はありません。見る

場所も限定され、編集して他で使おうとすると、また別コストが発生します。ですから、若い世代を中心に映像で撮影できるトレーニングをして、多少品質的に問題があるにしても、自分たちで総研大全体のアーカイブズを作ったら、どのようにでも使えます。著作物や映像の権利関係を整理したり、管理するには、大変なお金がかかることを承知しておいていただきたいと思います。